

あばっさ

vol. 26

アマゾン語で地の精霊

* ご住所等変更ございましたらご連絡いただけますと幸いです。

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL : 03-5481-1912 FAX : 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com www.rainforestjp.com

34回目のアマゾンから戻り想ったこと

9月半ば34回目のアマゾン視察から無事に生還！約30年間、2000日以上ジャングルに身を置いてきましたが、今回ほど命の危機を感じたことはありませんでした。これは動物的直感で、このままいくと後数年でこの星は大きな変化が起こり人類を含め、大多数の生物が減びるのではないかと。ということです。殆どの人は日常に埋没し、自分の身に迫らない限り己の問題として受け止めることが難しく、故に全ての自然現象を含め起こった出来事を他人事としてスルーしているのではないのでしょうか。今回の旅で昨年と歴然に違う現象として熱さがあります。気温は45℃を軽く超え、湿度が10%くらい。まるで灼熱地獄の砂漠にいたようでした。セスナ機から見える眼下の景色はそこそこで煙が帯のように続き煙く、気流も乱れ縦揺れが激しく墜落するのではないかと思ったくらいです。シングレー川の水嵩は川底さえ露出している箇所もあり、雨期に通常の雨量が望めなかったことがわかります。

この現象は全てとまでは言えませんが、人為的なことで起こっています。アマゾンの森は様々な乱開発により猛烈なスピードで消滅しています。ブラジル新政権が先頭に立ち、森を金勘定し壊しています。私はこう考えます。この地球を一つの生命体と考え、身体に例えるなら足の小指の爪が剥がれたとしても痛みは全身に及ぼします。国境で分断されているために私たちは酸素供給源であるアマゾンの森消失の深刻さに気付かず、痛みもわからず、しかし地球という身体はもうボロボロの限界まできています。一部の人たちの権力、地位、名誉を満たす事を結果的に皆が力を貸し、経済優先による利潤追求、そして物質文明の落とし穴にはまり、自然の法則を無視して押し進め得た欲のリスクが、次世代に多大なる負を残してしまったと。北欧の少女が、未来に希望等ない！と言った言葉が胸に刺さります。PC、スマホを使い、あらゆる情報も安易に手に入りますが、体験を通してこそリアリティーがあります。もう手遅れかもしれませんが、私は自分の体験を通し、結果を恐れずプロセスにエネルギーを注ぎ、アマゾンの自然が残りますように祈りを込めて、具体的な支援活動を続けて参ります。皆さまも大きな滝壺に向かう筏に乗っていると想像し、この筏のスピードが緩くなるように、気がついたところから小さくても、次世代のために、なんらかの行動を起こすことを切にお願い申し上げます。

(南 研子)



HOW TO HELP

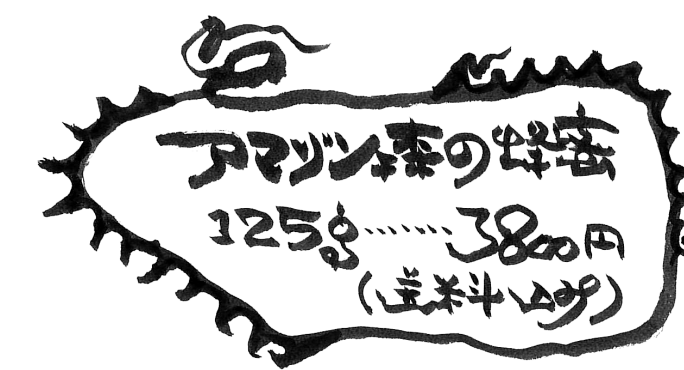
<年会費>大人: ¥5,000 18歳未満: ¥3,000

・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体

・三井住友銀行 東京中央支店
(普)7066247 熱帯森林保護団体

* 銀行からお振込の方は、
お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせください。

世界でも類のない、カウハロ族、マチア族の蜂蜜



たくさんのご注文をお待ちしております！

今年は、花の種類が違う2種類の蜂蜜をご用意しました！
2個ご注文の方には、2つのお味が楽しめます。
1個ご注文の方には、どちらかの蜂蜜がお手元に届きます。
※お選びいただけませんので予めご了承くださいませ。



お名前 ご住所 電話番号 ご注文数

をご明記の上、
こちらまでお申込みください！

メール: xingu@rainforestjp.com

FAX: 03-5481-1913



今年もジャングルから
持ちかえりましたー！

先住民族ホットニュース

「アマゾン大規模開発」が進められようとする今、立ち上がった先住民族女性たち

今年8月、首都ブラジリアに全国から113民族2000人の先住民女性が集結しました。8月9日から13日までの5日間、公園にテントを張って野営しながら連日、集会や省庁への抗議行動などを展開。最終日にはキャンプ村から国会前までのおよそ4キロを、通りを埋め尽くして大行進するという迫力でした。訴えたテーマは「領土: 私たちの肉体・私たちの精神」。自然の恵みと共に生きる先住民族の暮らしと文化は、その恵みをもたらしてくれる大地と深く結びついています。憲法で保障されているはずの先住民族の土地への権利を求める闘いは、命=身体と精神の権利を求める闘いであることを示しています。

当団体が養蜂事業を支援するシングー流域の女性たちも多数参加していました。ヤワラピチ民族の若い女性リーダー、ワタカルは「なぜ女性たちだけで？」という私の問いに、こう答えました。「私たち女性は子どもを生み育て、畑を作り、家族の食べ物を用意する毎日の暮らしの中で、先住民族をめぐる政治の状況やアマゾンの森の環境がどんどん悪くなっていることを日々、肌で実感している。この肌感覚から生まれる私たちの言葉には、人を、社会を動かす力があると信じているからです」。昨年10月の総選挙では、先住民族女性初の国会議員も誕生しています。女性たちの活躍にこれからも注目していきます。

(下郷 さとみ)



全国から集結した計113民族2000人の先住民族女性が国会に向かって大行進を行った



シングー地域の女性たちは伝統装束に伝統の唄と踊りで行進の最後尾を飾っていた



弁護士でもあるワピシヤナ民族のジョエニア下院議員が国会の院内集会で国会をつとめた



アマゾン森林破壊が進行する困難な時代の中で
力強い「プロタゴニズモ」が確実に育っていることを実感した旅

下郷さとみ（フリージャーナリスト/支援事業コーディネーター）

8月19日から9月7日にかけて当団体の南代表に同行して、消防団事業、養蜂事業の順にそれぞれの事業に取り組む村を訪問してきました。支援の場で当団体が大切にしているのは「プロタゴニズモ」です。これは「課題や問題に取り組むシーンで当事者自身がプロタゴニスタ(主人公)になる」という運動のあり方です。当事者である彼ら自身が主体的に考えて、決断して、解決の道を作り出していく……このプロタゴニズモを応援することが、私たち支援する側の役割だと考えています。

ブラジルでは民主化後の1988年に新憲法が制定されるまでは、先住民族は自身の判断で権利や義務を行使する能力のない「制限行為能力者」とされていました。支援の場でも、いわば「ほどこしを与える」という形が主流の時代が長く続きました。それとは全く違う考え方・方法であるプロタゴニズモは、成果が目に見えるまでにはとても時間がかかるものです。そんな中、今年のアマゾン訪問は、彼ら自身のやる気と主体性が力強く確実に成果をあげていることを実感できた、うれしい旅でした。

【養蜂事業】 豊かな森の恵みを生かす ― ハチミツの生産を通した持続可能な自立経済の創出

マチブとカラパロの村のハチミツが政府の2つの認証を取得して、いよいよ出荷が始まりました！
マチブ民族とカラパロ民族のふたつの村では、昨年までにハチミツ収穫作業施設が完成して、食品衛生法上の基準に則った環境が整いました。そして今年、いよいよ次のステップです！ 5月に農業省のアグロエコロジー部門（環境を守る持続可能な農業を推進）の職員3名が審査のためにふたつの村を訪問。その結果、みごと市販のための認証と有機認証を取得することができました。ハチミツの収穫は8月から10月ごろまで行われます。村内の衛生的な施設でハチミツをしぼってビン詰めしてすみやかに出荷されたハチミツは、今後、大手スーパーマーケットチェーン「ボン・デ・アスッカ」の店舗やサンパウロ市営ピニエイロス市場のアマゾン産品コーナーで販売されます。
養蜂事業はマチブ、カラパロ、ヤワラピチのそれぞれの民族がこんにちまで継続して行ってきましたが、今年からは新たにアウェチ民族とクイクル民族の村が加わることにになりました。マチブとカラパロの成功を見聞きしたそれぞれのコミュニティから「自分たちも取り組みたい」と当団体に支援の要請があり、それを受けての決定です。これからは、事業で一歩先を行く村が後に続く村に対してサポートを行うといった、コミュニティ間の相互支援にも取り組んでいきます。技術的にも経営的にも自立して彼ら自身の手で事業を運営していけるようになることを最終目標に、当団体の支援はまだしばらく続きます。



←マチブ民族の村のハチミツ収穫作業施設の前で、左から族長、当団体・南代表、3人の養蜂士、当団体が業務委託している養蜂専門家ウェメルソン。今年、法律が改正されて作業施設にはトイレとシャワー室を設置しなくてはならなくなった。来年の収穫期までに必要な増設工事を当団体が追加支援の予定。



←カラパロ民族の養蜂士が誇らしげに手に持つのは有機認証の証書。シングーの16民族で組織するATIX（シングー先住民族の土地協会）が政府から有機認証団体の資格を得て審査・認証授与を行っている。またATIXが構築した流通卸しのシステムに連携して、当団体が支援する養蜂事業のハチミツは市販化される。



←ウェメルソンのサポートで記録の仕方や文書の書き方を学ぶカラパロの養蜂士。2つの政府認証は有効期間が1年で、更新には詳細な作業記録や在庫管理記録の提出が必要。筆記や計算という文化が最近までなかった先住民族にとってはハードルが高いが、将来の自立に向けて彼らは張り切って挑戦している。



←ハチミツの収穫作業。花のミツはミツバチが集めた時点ではまだ水分量が多い。ハチたちは枠にためた花ミツに羽根で風を送ってほどよく乾燥・熟成させると表面をミツロウで覆って密封する。ハチミツの収穫作業は、そのミツロウの蓋をそっと取り除く作業から始まる。



←ミツロウの蓋を取り除いた後、手動式の遠心分離機に枠を入れてぐるぐる回してハチミツを分離すると、下からとろりと濃厚なミツが出てきた。シングーの森の花の天然ハチミツは農業や大気汚染などとは無縁の「世界一ビューでおいしいハチミツ」として、サンパウロなどの大都市で人気を集めている。



←村の周囲に広がる森の一角に設けられた養蜂場。アルマジロなどの野生動物に荒らされないよう常にきれいに草刈りをして管理しなくてはならない。木のうろに巣を作る野生のハチの群れを捕獲して箱で飼って増やしていくが、経営的に自立できる最低ラインのハチミツ生産量・年間300キロ達成が次の目標。

【消防団事業】 アマゾンを森林火災から守る ― 先住民族のプライドをかけた命がけの闘い

★ 乾燥化・高温化が進行するアマゾンで、かろうじて残された保護区の森を守り抜く

シングー川の中流域に暮らすカヤポ民族とジュルーナ民族が合同で取り組む消防団事業は、今年、若い新人団員が加わって、ますますパワーアップしています。アマゾンのような広大でアクセスが非常に困難な森では、いったん火が燃え広がってしまえば手の施しようがありません。森林火災でいちばん重要なのは、まず火を出さないこと。そして小さな火元のうちに消火することです。消防団では、乾季の終わりに村々で行われる伝統的焼畑の火入れに際して延焼を防ぐ万全の対策を取る防火活動、焼畑の延焼や保護区不法侵入者による火の不始末などで発生した火災を小さなうちに消す消火活動、不法侵入を防ぐパトロール活動などを実施しています。

インターネット環境のある方は、グーグルマップで「MT-322」と入れて検索してみてください。これはマトグロッソ州道322号線のこと、シングー川中流部の先住民族保護区の森の真ん中を横に切り裂いて道路が通っているのがわかるはずです。当団体が支援する消防団事業は、このMT-322号線をはさんだ両側の森で実施されています。マップを見てもわかるように、保護区の森は大農場地帯に取り囲まれています。これらは1軒の面積が数千から数万ヘクタールにもおよぶ、肉牛の放牧農場や大豆などの輸出用穀物栽培農場です。以前はここもうっそうとした森だったとは想像もつかないほど、地平線まで木が1本もない景色が広がっています。

大農場地帯は、乾季には大地も大気もまるで灼熱砂漠のようにカラカラに乾燥して、保護区の森の中にまで乾いた熱風を吹き込ませます。アマゾンの森林火災の背景には、このような人為的な環境の変化があります。たとえば、MT-322号線を走る大型トレーラーの運転手が窓から何気なくポイ捨てするタバコの吸い殻すらも、大きな森林火災の最初の発端となり得ます。数百年、数千年に渡って営まれてきた伝統的焼畑の火入れも、特別な対策無しでは延焼が防げない事態となっています。農場主が農地を広げるために違法に森を焼く野焼きも、アマゾン森林火災の大きな要因となっています。

★ 団員ひとりひとりがリーダーシップを発揮して、事業の自主運営に取り組む

こうして年々環境が悪化するなかで、消防団の若者たちは、時には命の危険にもさらされるような過酷な活動に果敢に立ち向かっています。「自分たちの森は自分たちで守る」と彼らは言います。そして、こうも言っていました。「アマゾンの森は地球の財産だ。それをぼくたち森の民のプライドをかけて守ってみせる」。今年は若い団員が新たに加わったことで、先輩団員たちの自覚がさらに高まったようでした。33人の団員ひとりひとりが何らかの役割の責任者になるという試みを彼ら自身で発案して実行していました。たとえば、消防道具や燃料、食料などそれぞれの保守管理係を決めて、管理記録をつけていく、という試みです。団員全員で情報を共有し合い、物事をミーティングで議論して決めていく彼らの「プロタゴニズモ」実践の姿に、とても頼もしい思いがしました。



←消防団員と村の長老たち。中央は当団体・南代表。10代の若い団員も新たに加わって全体で33人になった。毎年8〜9月に消防団本部のあるピアラス村で約1ヶ月間、合宿しながら実地体験を通したトレーニングを全員で行い、その後、各人が自分の村に戻って村人と共に消防活動に取り組む。



←水タンクや道具などの運搬には荷車を引いたバイクを使用する。現在、団のリーダー2名が運転免許を取得済みで、来年はじめの雨季の活動休止期間には、このふたりが新たに免許取得に挑戦する予定。自動車学校のある遠いまちまで出かけて2ヶ月近く滞在しながらの受講となる。



←延焼を防ぐ万全の対策を取って焼畑の火入れを行う。火入れする場所の周囲にぐるりと、落ち葉や枝木や草などすべての可燃物を取り除いた幅5メートル以上の緩衝帯を設けたうえで、風向きを慎重に見ながら要所要所に火を入れていくという、高度な技術だ。



←ひとりひとりに係を決めるミーティングが開かれた。リーダーが「消防団は火に立ち向かう仕事だ。ちょっとした油断が自分だけでなく他のメンバーを命の危険にさらすこともある。覚悟と責任感を持って取り組んでほしい」と団員全員に熱く語りかけていた。



←シングー川流域の先住民族保護区の森では今年もあちこちから火災の煙が上がっていた。それでも、消防団の活躍によって大規模な火災に発展する前に抑え込むことができた。今年、世界中で報道された森林火災はアマゾン北部地域の森で多発した。（当団体の支援対象地はアマゾン南部）



←シングー川流域の先住民族保護区の周囲には地平線まで1本も木がない大農場が広がり、乾季にはまるで砂漠のような灼熱乾燥の景色になる。先住民族保護区の森の中と周辺の大農場地帯とでは平均気温が4〜6℃違うという研究論文もあるほどだ。